

氏名・(本籍地)	小林 伸 二 (東京都)
学位の種類	博士(文学)
学位記の番号	乙第86号
学位授与の日付	平成24年3月23日
学位論文題目	春秋時代軍事外交研究
論文審査委員	主査 宇高 良 哲
	副査 川勝 賢 亮
	副査 佐藤 成 順
	副査 藤田 忠

小林 伸 二氏 学位請求論文審査報告書

「春秋時代軍事外交研究」

論文の内容の要旨

『春秋時代軍事外交研究』と題する本論文は、序論
問題の所在 第一部 春秋時代の軍事と支配構造、
第二部 春秋時代の外交と国際社会 結論 要約、以上
に大別される。

序論 問題の所在においては、一 春秋時代史研究の動向と意義について、中国史研究の中では古代帝国の完成期と見なせる秦漢帝国形成史の前史として扱う研究が多い中でも、本論文著者は古代帝国の前史の意義を認めつつも、この時期のより個別研究の深化を目指す研究の存在に注目し、さらにはこの時代中における貴族(世族)政治のなかで改革運動が一つの潮流として存在していた諸研究に問題の深化を読む。また軍事研究は制度の全体像を提起する研究を目指し、政治史研究では、当然のことながら当該時代史の特徴をなす覇者政治に焦点を絞る。そして研究は『春秋』と『左伝』を主たる史料とするのに対して、考古出土史料を傍証とする視角が提起される。以上の研究整理のため我が国及び中国その他の研究を実に網羅的全体的に紹介分析し、著者の本論文作成の前提を説明する。敢えて言えば、著者は春秋時代の軍事と支配構造、外交と国際社会の両局面において、この時代史が単なる秦漢帝国形成史の前史としてのみの立場で研究すべきではなく、春秋時代史の個性究明に焦点を当てるべきとし、本論における実証研究の目的を説明する。序論の二は春秋時代史料研究の方法と史料であるが、『春秋』と『左伝』の史料性の史学的分析は主として両史料の従来の諸説の文献学的考証と考古出土資料の照合による統一

的検証という方法であることが確認される。ただ、この視角については近年相当新機軸というべき議論が学界で交わされ、問題は多岐にわたるが、『春秋』と『左伝』等三伝の叙述の要素の内容が史料として利用可能かの検証が重要であるという論点を確認した。

次に三 本論文の視座と構成は『春秋』と『左伝』の史料性の確認の上に春秋時代の軍事と支配構造、外交と国際社会の両面がいかなる時代相の説明を可能にするかが述べられる。

本論に入ると、まず、第一部 春秋時代の軍事と支配構造では、第一章軍事と支配構造は、『春秋』に記述された各国軍事行動、軍事行動の特徴、軍事行動と国邑・鄙邑と検討され、軍事行動が春秋時代の采邑制度と関係したことを述べる。第二章滅国・遷徙制作は、『春秋』『左伝』の記事から春秋時代における滅国・遷徙の語義を説明する。すなわち『左伝』に注した杜預が滅国を宗廟社稷の亡という礼世界的観点で説明し、国を滅ぼし統治する場合、旧来の氏族的秩序による住民の抵抗を恐れ、強制的に遷徙することがあったとする社会史的説明もある。著者は『春秋』『左伝』の記事の検討に考古学的成果を併せて滅国・遷徙の実態把握に努め、結論として国が滅びる事態は単に宗廟社稷の亡という礼世界的観点の理解に終わるのではなく、政治事実として強制移動があったとする。ただ、それが支配の再編の如何なる具体的内容を持つかは必ずしも明瞭ではない。第三章占領政策は、前章に附随した政治史的内容である。ここも第一節『春秋』『左伝』の国邑占領、第二節国邑占領の実態、第三節国邑占領

と附庸小国、第四節『春秋』『左伝』の鄙邑占領、第五節鄙邑占領の実態と述べられ、「取」軍事行動の非継続性と、対象邑の返還が確認できるとする。第六節鄙邑占領と鄙邑は、そもそも鄙邑とは何かを説明し、国邑—鄙邑の支配関係を確認し、それが軍事行動による占領政策によりその対象が附庸小国に限定されたと結論する。ただ、逆に鄙邑側から見ると、軍事行動—占領政策の狭間にかえて鄙邑の自立性が窺えるという。第四章攻囲政策は、これも軍事行動の一部である。儀式的なものか否かの判断が重要で、儀式的なものを重視しない結論を導く。国の大小規模と攻囲行動の頻度を数え、『春秋』『左伝』の検討の結論は攻囲の実際が魯国を中心とした周縁で問題になる。ただ、これは『春秋』『左伝』を史料とした当然の結論ではないか。その中で攻囲行動に国邑—鄙邑の支配構造の変化がからむなどは重要な指摘である。第五章対峙政策も同様な軍事行動の分析である。第六章黄国の滅亡は、滅亡事例の具体であるが、黄君孟夫婦墓が史料となり、黄国青銅器の銘文が検討された上で『春秋』『左伝』に見える黄国の滅亡記事を分析する。最後は滅亡後の黄国の存在の確認である。第七章紀国の遷徙は、遷徙の具体的事例である。紀国と魯国、紀国と周王室、紀国と齊国、遷徙政策と紀国、等々を取り上げる。

第二部春秋時代の外交と国際社会は、第一章会盟と外交は、春秋時代の外交を特色付ける会盟が魯国関係について説明される。ただ、魯国中心の会盟に覇者との外交も留意されている。第二章齊覇・晋覇の会盟地は、第一部の軍事行動などで重視した国邑—鄙邑関係の鄙邑が覇者との会盟地となっていたことを指摘する。附論として楚覇の会盟地が検討される。第三章朝聘外交は、『春秋』に見いだせる二国間同士の「来朝」「来聘」「如」「来」などの外交関係を考察し、それらが諸侯国の相互関係にもとづく国際法に準じた秩序社会を前提にしたものだとする。第四章弔問外交は、その史料事例が礼制度との関連で多様に紹介されている。第五章婚姻と国際社会は、前章の凶礼の反対である吉礼嘉礼の外交関係の検討である。また「媵」の意義が、1 婚姻と青銅器、2 媵と青銅器と『春秋』『左伝』の文献史料を補足しながら説明される。第六章国君即位と国際社会は、『春秋』魯国君即位事例、『春秋』他国君即位事例、『左伝』の国君即位が説明される。本来は春秋時代の王権構造に関わる史実の問題であるが、それには触れず、『春秋』が魯国内外の国君の年代記であるという文献研究に終わっている。第七章衛国の外交と政治は、衛の春秋時代を通じての外交と中央集

権政治が説明される。第八章杞国の外交と政治は、春秋時代の山東半島にあった杞国の外交と政治が莒国、魯国・齊国、魯国・晋国、晋国・齊国、晋国といった二国、三国の外交関係を検討した上で、杞国の国際関係を究明する。

結論では序論、問題の所在から第一部の春秋時代の軍事と支配構造、第二部の春秋時代の外交と国際社会について諸章で究明した内容が要約される。

審査結果の要旨

『春秋時代軍事外交研究』と題する本論文は、春秋五覇や孔子の時代ということでつとに著名である。しかし、この時代を歴史として扱うに最大の課題として何を史料にするかの問題がある。春秋時代はその名がついた『春秋』がこの時代末期の人、孔子によって編纂されたと言われる。だが孔子は儒教の祖、したがって『春秋』は他の書経・易経・詩経・礼記等とともに五経の一の経書として扱われて来た。さらに『春秋』には注釈書の形をとる三伝がある。三伝は公羊伝・穀梁伝、そして左伝（左氏伝）であるが、前二者が早く世に知られたのに対して、左伝は前1世紀の前漢末のことである。一方、三伝の内容については公羊伝・穀梁伝は春秋の義を明らかにする経学の書とされるのに対して、左伝は歴史事実を述べた史学の書とされた。春秋三伝の価値確認は中国思想史上の格好の課題であったが、これを近代史学の史料とするにはまずもって春秋三伝、特に『左伝』の史料批判が必要である。従来の研究成果によれば、『左伝』の思想と叙述内容は戦国時代のものであり、戦国の人孟子の思想と共通するという指摘が有力である。さらに中国史学の学説史上では、春秋時代、さらにそれに続く戦国時代は先秦時代という用語の名の通り、中国における古代統一である秦漢帝国に先行する時代であるとされ、皇帝制度や郡県制などが春秋・戦国期にどこまで準備されていたかが主要な研究対象とされた。ところが殷周から春秋・戦国、秦漢時代と継承される青銅器文化の伝統はともかく、先秦時代の文字史料は彼の秦始皇帝の焚書により消滅した。壁の中から発見された秘書はと多くの議論がある。

以上の本論文の根本史料の種々の問題点については、論文中でも説明があるが、なお最終試験の口頭試問の席上でも、主査・副査からの質疑に対して論文提出者は、主として本論文の序論に述べられているような、秦漢帝国形成史の単なる前史としての研究ではなく、この時期のより個別研究の深化を目指し、春秋時

代史の個性究明に全力を挙げることに、『春秋』『左伝』を主たる史料とすることの補強として考古出土史料の利用に視点があると説明され、その上で『春秋』と『左伝』を主たる史料として論文が展開されるのである。

論証のため著者は論文を第一部春秋時代の軍事と支配構造、第二部春秋時代の外交と国際社会に二分し、第一部春秋時代の軍事と支配構造では、第一章軍事と支配構造、第二章滅国・遷徙政策、第三章占領政策、第四章攻囲政策、第五章対峙政策、第六章黄国の滅亡、第七章紀国の遷徙、以上で春秋時代の軍事と支配構造についての諸史実が豊富な事例検証によって確認され、特に国邑一鄙邑の支配構造の発見などは春秋時代史像構築に有力な史実を見いだした。ただ逆に滅亡や遷徙が礼的世界の出来事でないとしたのは可であるが、しからば滅亡や遷徙は春秋時代の軍事と支配構造を説明するだけかとなると、春秋時代の社会と政治軍事がやや矮小化されることも危惧される。これは第二部の課題である。

第二部春秋時代の外交と国際社会は、第一章会盟と外交、第二章齊覇・晋覇の会盟地、第三章朝聘外交、第四章弔問外交、第五章婚姻と国際社会、第六章国君即位と国際社会、第七章衛国の外交と政治、第八章杞国の外交と政治、等々春秋時代の外交を特色付ける会盟と覇者を基軸として会盟地の問題、朝聘・弔問・婚姻・即位といった春秋時代の外交の契機を詳細に分析する。ただ、著者はそれら春秋時代の外交と国際社会を純粋に歴史学として理解しようとする姿勢を見せるがそれは本来不可能であり、春秋時代の外交の特色がやはり礼的世界から離陸できないこと事態が経書としての『春秋』『左伝』の立場である。

以上であるが、本論文は先行研究の的確な問題整理に立ち、春秋時代の軍事と支配構造、春秋時代の外交と国際社会の両局面にわたり、伝来の『春秋』と『左伝』という文献史料と考古学的出土史料の両者を関連させ、多くの新知見と独創に満ちた意欲的研究で論文の価値水準は課程博士論文の水準をはるかに超えるものがある。また、中国語・英語などの語学力も十分な水準にあることは本論文の内容、及び口頭試問から確認された。以上によって本論文提出者が博士（文学）に値する成果を示し、学力をもつことが確認され、本論文審査は合格と判断するものである。